

One World – One Health の実現に向けて
1つの世界、1つの健康

News Letter

2017
FEBRUARY
VOL. 8

「ニュースレター」
北海道大学
大学院獣医学研究科



北海道大学博士課程教育リーディングプログラム
One Healthに貢献する
獣医科学グローバルリーダー育成プログラム



One World – One Health
1つの世界、1つの健康

【お問い合わせ】
北海道大学大学院獣医学研究科
国際連携推進室
リーディング大学院担当
〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目
TEL:011-706-9545
Email:leading@vetmed.hokudai.ac.jp
http://www.vetmed.hokudai.ac.jp/onehealth/



北海道大学 Hokkaido University
大学院獣医学研究科
Graduate School of Veterinary Medicine



The 4th SaSSOH

Active Discussion Session 3

Student Session 7

The 4th SaSSOH

Sapporo Summer Seminar for One Health

開催日 2016年9月20・21日 開催場所 北大 獣医学研究科 講堂



The 4th SaSSOH Overview

4th SaSSOH 運営委員会代表 比較病理学教室 助教 青島 圭佑

Sapporo Summer Seminar for One Health (SaSSOH) は若手教員が中心となって開催する国際シンポジウムであり、毎年9月に国内外から多数の招待講演者を迎えて開催されます。本年度はいわゆる学会スタイルの口頭発表を減らし、参加者全員が能動的に参加できる機会をたくさん取り入れました。その分大変だったと思いますが、参加者の皆さんは新鮮な気分が味わえたのではないかと思います。

本年度の SaSSOH のテーマは「How does your research contribute to One Health?」です。学生たちは本学のリーディングプログラムの中でOne Health について学んでいます。しかし、One Health という

と規模が大きい話がほとんどであり、現実味を感じることが難しく、理解はしていても実行に移すことは難しいのではないかと思います。そこで、One Health の概念を身近に考えられるように、そして今後の研究の方向性のヒントも得られるように、本テーマを設定しました。

今回の SaSSOH を特徴づけるセッションは2つあります。1つは「Active Discussion Session」。設定されたトピックについて6名からなるグループでディスカッションを行い、その議論の結果を「全員」が発表します。もう1つは「Student Session」。学生たちが企画し、運営するセッションです。学生たちも企画運営能力が学べ、自分たちが学びた

ことが学べるように本セッションを設けました。

本ニュースレターでは「Active Discussion Session」と「Student Session」について、それぞれの担当者からご紹介させていただきます。



スケジュール確認中に一枚

プログラム

1日目

- 🕒 午前
 - オープニング
 - 口頭発表
 - フラッシュトーク
 - ポスター発表
- 🕒 午後
 - 口頭発表
 - 学生セッション
 - ウェルカムパーティー



2日目

- 🕒 午前
 - 口頭発表
 - フラッシュトーク
 - ポスター発表
- 🕒 午後
 - 口頭発表
 - 基調講演
 - パネルディスカッション
 - アクティブディスカッションセッション
 - クロージングセレモニー



招待講演者



▲ Dr. Ana Maria Bispo de Filippis

Head, Laboratório de Flavivirus, Instituto Oswaldo, FIOCRUZ, Brazil



▲ Dr. Monica Kaho Herkules Bando

Veterinary Clinical Sciences
College of Veterinary Medicine
Washington State University, USA



▲ Mr. Mitsuru Miyata

Executive Leader Writer and Webmaster of Nikkei Biotechnology Online
Nikkei Business Publications, Inc., Japan



▲ Dr. Salome Dürr

Veterinary Public Health Institute
Vetsuisse Faculty
University of Bern, Switzerland



▲ Dr. Yoko Aoyama

Regional Veterinary Officer
Regional Representation for Asia and the Pacific
World Organisation for Animal Health, Japan



▲ Dr. Boripat Siriaronrat

Assistant Director of Conservation & Research
Endangered Species Conservation & Research Institute
Zoological Park Organization, Bangkok, Thailand



▲ Dr. Bon-Kyoung Koo

Group Leader
Wellcome Trust - Medical Research Council Stem Cell Institute,
University of Cambridge, Tennis Court Road, Cambridge, UK



▲ Dr. Masanori Imamura

Assistant Professor
Department of Molecular and Cellular Biology
Primate Research Institute
Kyoto University, Japan



▲ Dr. Julie A. Moreno

Post-doctoral Fellow
Prion Research Center
Department of Microbiology, Immunology and Pathology
Colorado State University, USA

Active Discussion Session & Student Session

4th SaSSOH 運営委員会代表 比較病理学教室 助教 青島 圭佑

本年度の SaSSOH では2つの新しいセッション「Active Discussion Session」と「Student Session」を導入しました。前者は SaSSOH 運営委員が、後者は学生が企画・運営を行いました。形式はどちらもグループディスカッションであり、全員が積極的に参加できるようなセッションを、という思惑は同じだったようです。結果的に、参加者は開催期間の2日間ともディスカッションを行うことになり、かなり大変だったと思います。ただし大変なほど得られるものは大きいはずで、一つの特訓と思って今後の研究活動に生かしてもらいたいと思います。

Active Discussion Session

Topic “Coming up with an ingenious collaborative research project using each person’s knowledge and skill in a group”

授業や実験、学会など何事においても、ただ話を聞いているだけよりは、積極的に自分から発言したり手を動かしたりの方が記憶に強く残り、より理解も深まるはずで。しかし、学会スタイルの講演ではほとんどの時間は座って話を聞くだけで、質疑応答に参加できる人も限られてしまいます。そこで本年度の SaSSOH では思い切って口頭発表を大幅に減らし、全員が能動的に参加できるセッション、Active Discussion Sessionを導入しました。



プレゼンテーション用ポスター作成中

トピック

トピックは「グループのメンバーが持つ知識やスキルを利用して独創的な共同研究を考える」というものです。元々は本 SaSSOH のテーマである「自身の研究がどのように One Health に貢献するか」というトピックで行おうと考えていました。しかし、そのようなトピックだと話が大きくなりすぎて、とてもではありませんが短いディスカッション時間で結論を得ることは不可能です。そこで、One Health を実現するための第一歩として必要な、共同研究に焦点を絞ってトピックを設定しました。

グループ

1グループ6名から構成され、5～6グループで1つの部屋が構成されます。全部で3つの部屋でグループディスカッションが行われました。参加者は学生、ポスドク、そして招待講演者の方々です。教員の先生方の中にも参加して下さった方がいらっしゃいました。グループのメンバー構成にも一工夫しました。メンバーはくじ引きで決めますが、日本人学生と外国人留学生在がバランスよく混ざるように、それぞれが別々の箱からくじを引いてグループを決定しました。

各部屋の様子については、それぞれの担当者が紹介しておりますので、4～6ページの報告書をご参照ください。

ディスカッション

45分間で共同研究案を作り、発表用のポスターを作成します。かなり短い時間であったとは思いますが、白熱した議論が展開されていました。

プレゼンテーション

発表は全員の前で行うのではなく、少人数のグループの中で行われます。このグループはディスカッション時の各グループからそれぞれ1名が参加することにより構成されます。各グループはそれぞれ別のポスターの前に集まり、元のグループでそのポスターを作成したメンバーが、そのポスターについて5分間で他のメンバーに説明します。その後、グループごと別のポスターに移動し、今度はそのポスターを作成した別のメンバーがその内容について説明します。これを繰り返すことで、全員がそれぞれの作成したポスターについて少人数グループの中で発表することになります。少々トリッキーな形ですが、少人数の発表の場を設けることで発表しやすい雰囲気を作るという狙いがあります。また、全員が発表することが可能です。他人の発表を聞くだけでなく、能動的に頭を働かされるように、このようなシステムを用意しました。

Active Discussion Session - Room I

山口先生のグループ紹介

寄生虫学教室 准教授 中尾 亮



司会進行 山口先生

今回初めて SaSSOH のプログラムとして採用された Active Discussion Session は、2日目の最後に実施されました。2日間英語づくめの SaSSOH の最終プログラムだったこともあり、さすがに参加した学生さんの表情には疲れが見え始めています。しかも、ただの Discussion ではなく、“Active” Discussion と銘打っている（しまった）以上、こんな調子で大丈夫なのだろうか、私を含めスタッフとして参加した教員は内心とても心配していました。

山口先生の簡単なガイダンスの後、アイスブレイクで参加者同士の自己紹介がありました。6人から構成される小グループでディスカッションを行うのですが、日本人と留学生在がバランスよく混ざるように、それぞれが別々の箱からくじをひいてグループが作られました。いつもはあまり関わりのない人同士が集

まり、この段階でもうすでに新たな出会いに楽しそうな学生さん。

「Coming up with an ingenious collaborative research project using each person's knowledge and skill in a group」とのテーマでディスカッションは始まりました。会場の教室には6グループが机を隣合わせで配置されましたが、序盤こそ沈黙のあるグループがいたものの、議論が進むにつれお互いの会話が大声でないと聞こえないくらいの盛り上がりを見せました。学生さんの表情に目を向けると、先ほどの疲れは吹っ飛んだようで、皆生き生きとした表情に変わっています。やはり、アイデアを練るのは、研究者にとって一番楽しい瞬間ですから、当然のことかもしれません。

この Active Discussion Session では、最終的に各グループの案をポスターにまと

め、他のグループの前で発表を行います。キーノートスピーチでジカウイルス感染症の話聞いて関心が高まったからでしょうか、多くのグループは蚊などのベクターが媒介する感染症の One Health 的アプローチをテーマに選びました。どのグループもユニークで面白い発表でしたが、それを私たちスタッフの教員が審査し、ディスカッションと発表の内容を総合評価して、一番高い得点を得たグループに最優秀グループ賞が贈呈されました。

さて、スタッフとして参加した教員のもう一つの仕事に、「学生がディスカッションにつまずいた時に適切に助言を行い、ディスカッションの進行を補助する」とスタッフ用の指示書には書かれていました。結局、その仕事は回ってこなかったことはここに書くまでもありません。



アイデアを考える参加者たち



他大学の学生も参加してのディスカッション

Active Discussion Session - Room II

Could you develop a team-based approach for One Health—in a foreign language?

Michael Henshaw

Assistant Professor of English as a Foreign Language



General facilitator Mike

People stand in groups at packed tables, their chairs cast aside as they lean in to engage with one another over the loud hum of an entire room involved in facing the challenge set before them: *Coming up with an ingenious collaborative research project using each person's knowledge and skill in a group.*

And indeed, after 45 minutes of discussion among graduate students and the occasional invited speaker, each group succeeded in creating a vision for a better world. Within each of the 6 groups, students considered their particular skill set unique to their respective labs. After all, the groups were diverse: 3 of the 6 seats at each table were for Japanese while the other 3 were for international students or invited speakers. And almost everyone was from a different laboratory. This mixture led to proposals that ranged from a rabies-tuberculosis-listeriosis task force, to lab-grown meat, to the winning proposal: one vaccine that can be shared between humans and animals.

Perhaps the world won't be expecting a universal vaccine anytime soon, but the efficacy of each

proposal was incidental—what mattered was the method by which the groups came to have a vision. Really, the question that the organizers were asking the students was: *Can you contribute in English to a coherent plan that grabs the attention of an audience? And then can you present that plan as a 3-minute presentation followed by audience questions?* The answer to both questions was “Yes!” There were no quiet moments of embarrassed silence. Even after two long days of the conference, in this final event at six in the evening, the people wanted to win! And so they talked.

It wasn't their first time to do this sort of activity. Most of the students had previously taken part in at least one of three similarly arranged leadership workshops held at the Graduate School of Veterinary Medicine throughout the previous 9 months. But at SaSSOH the stakes were higher as more professors were watching and there were more prizes to win. On top of this, the preparation time—at only 45 minutes—was shorter. I'll admit it, I was skeptical that the students would be *active*. 'Sure, they might discuss,' I had said to

the organizing committee, 'but I'm not sure they'll be *into it*.' Aoshima-sensei returned, 'They'll have to be.'

And they were. My title at this function was *general facilitator* but in practice the students needed little guidance. I explained the procedure and then basically became a time-keeper. As the English teacher of this faculty, I won't comment on the specifics of the teams' proposals. But I will say that I was pleased with the high level of engagement in a topic that was both social and intellectual, all done in a foreign language.



Members brainstorm their unique contributions.



The team creates the poster for their presentation.

Active Discussion Session - Room III

難易度やや高めのRoom III

比較病理学教室 助教 青島 圭佑



General Facilitator 青島先生 (左), Supporter 日尾野先生 (中) と 迫田先生 (右)

私が担当した部屋は他の2部屋とはちょっとだけ違うところがありました。それは招待講演者と教員が多数参加していたという事です。最初は学生だけの参加で、と思っていたのですが、招待講演者の方々も参加したいと言ってくれたこと、そして参加人数が不足していたこともあり、数名の先生方にも参加して頂きました。結果、ディスカッションのレベルが多少上がり、この部屋に参加できた学生さんにとっては大変だったかもしれません。しかし、ハイレベルな招待講演者や教員の方々とのディスカッションが出来たことは、非常

に得難い経験だったのではないのでしょうか。

招待講演者や教員が混じっていても、どのグループの学生も活発に議論していました。隣のグループがうるさくてディスカッションが出来ない!と訴えるグループもあり、かなり白熱したディスカッションが繰り広げられていました。そんな中、英語で議論するのは日本人の学生さん達は大変だったと思います。外国人とのディスカッションを通じて、完璧な英語じゃなくても意外と通じるんだな、とか、言いたいことが上手く言えなかったな、といった感想も得られたのではないでしょ

か?良かったことにしろ、悪かったことにしろ、得られた経験は貴重なものです。せっかく頑張ったのですから、それを無にせず、良かったところはより良くなるように、悪かったところは改善して、更に自身の能力を向上させて貰いたいと思います。

私は General Facilitator として全体進行を行って行っていましたので、プレゼンテーションについてはどのような発表をしていたか細かく把握することは出来ませんでした。その点については次の日尾野先生の報告書をご参照ください。

Invited speakerがいてもちゃんと個性が出てました

微生物学教室 助教 日尾野 隆大

Room III は多くの Invited speaker、そして人数調整のために一部先生にも参加してもらったことから、少々他の部屋とは違う雰囲気になっていたのではないかと思います。この辺りのことは青島先生の報告書に譲るとして、さて、実際の議論はというと「仮想のリサーチプランを立てる」という目標に対して、各グループが全く異なるアプローチを取っていたことが印象的でした。できるだけ包括的な課題を設定し、そこに個々人の役割を当てはめていくグループ、全員の技能が生きるように仮想の状況を設定しその解決をプランとするグループ、せっかく入ってくれた Invited

speaker (Koo 博士) の持つ技能を最大限に利用するちゃっかりとしたグループもありました。プレゼンテーションの方も、やはり議論の中心になっていた学生は話すべき論旨をよく理解しているので上手かった印象でした。一方で、プレゼンテーションの段階になって自分なりの解釈や意見を披露する学生もあり、同じ議論に加わっているメンバーでもそれぞれの立場によって捉え方が異なることを感じました。ディスカッションでは「全員の技能を生かす」という制約がやはり難しいところだったようで (それが面白いところでもあるのですが)、その為にはまず自分が何をでき

るのか、そしてチームの中でそれをどう役立てることができるのかしっかり考える必要があります。学生にとっては、自分自身を見つめ直す良い機会になったのではないのでしょうか。



学生とInvited Speakerが真剣議論

Student Session

“Glocal crisis communication in the real world”

4th SaSSOH 運営委員会代表 青島 圭佑

Student session は学生が企画し、学生が運営するセッションです。担当してくれる学生をボランティアで募ったところ 4 名の学生が手を挙げてくれました。全員留学生であり、分野や国籍もバラバラであったため、異なるアイデア・異なる価値観で企画を進めてくれるものと期待しました。結果、期待以上のセッションを用意してくれたのですが、その具体的な内容については彼らが執筆した報告書に譲りたいと思います。

私が最も感心したのは、楽しく学べる雰囲気を作るための工夫でした。セッションのテーマを選ぶためのチケットを用意したり、オリジナルムービーを作って参加者を楽しませたり、会場にもデコレーションをしていました。こうした工夫は雰囲気を和らげ、リラックスした気持ちでディスカッションに取り組むことが出来たのではないかと思います。学生として学ぶ側にいる彼らがどのように学びたいのか、これを知ることが出来たのは、私



学生セッションメンバーと招待講演者Dr. Boripat Siriaronrat(左から2番目)

にとっても非常に大きな収穫でした。学生主宰のセッションは学生のためだけでなく、教員にとっても大きな意味を持つものだと思います。今後の SaSSOH でも学生のセッションが行われるかは私にはわかりませんが、今後も互いに学べる場を提供して貰えたらと思います。

Student Session ①

Clinical Science Disaster Preparedness for Pets

Suranji Wijekoon

DC 3, Laboratory of Surgery



Before the disaster, the best thing we can do for ourselves and our pets is to be prepared. We deliberated about disaster preparedness for pets at the SaSSOH Student Session as a team work. The clinical session was organized by student committee members and conducted by Suranji Wijekoon with assistance from Tatsunari Kondoh, professors Keisuke Aoshima, Hiroshi Ohta and Mike Henshaw.

Short documentary about aftermath of illusory earthquake was prepared with other student committee members, Lesa Thompson, Suppalak Kaewkwan and Md. Islam to illustrate the social responsibilities on homeless animal. All the participants were grouped after pop quiz and given roles such as veterinarian, governmental officer, animal welfare society and pet owner

to facilitate the discussion within and among the groups. At the end of the session, each group made a short presentation about responsivity of each role in the society for the proper disaster preparedness of pets. Decision making, team spirit and balance of participation were evaluated and scored by professors and invited speakers to select the best team work. The winners got the certificate at the closing ceremony of SaSSOH 2016.



Student Session ②

Infectious disease Leakage in BSL4 facility

Md Atiqul Islam

DC 3, Laboratory of Laboratory Animal Science and Medicine



Bio safety level 4 (BSL-4) is the highest level of bio safety precautions, and is appropriate for work with agents that could easily be aerosol-transmitted within the laboratory and cause severe to fatal disease in humans for which there are no available vaccines or treatments. The Leakage in BSL4 facility workshop was aiming for better understanding of global health threat including socio-economical, ethical issues and how to communicate, solving problems with making good decisions in such a glocal crisis if arise in future.

This session was run by Md Atiqul Islam where key story was presented showing news videos. News videos about Leakage in BSL4 facility were

prepared by SaSSOH student committee members. Special Thanks to Mike Henshaw for his technical assistance and suggestions for preparing news videos. The workshop was very lively due to active participations and audio-visual environment. Participants were involved in group discussions and acted as role play such as Medical, Ethical, facility management and Socio-economic team to address possible crisis and solutions for real life. They concluded to work all team together to solve such a glocal crisis. There were also pop quizzes for the participants that were funny, interesting and brainstorming for basic understanding of infectious diseases. Participants presented their thought and ideas using poster

and shared ideas among all participants. Participants were scored mainly based on communication skills, generation innovative ideas, decision making and presentation skills. Certificates were provided to top scorer participants at closing ceremony of SaSSOH 2016. Several observers and invited speakers visited during this workshop and enjoyed active participations and lively environment.

Thanks to Dr. Hiono and Dr. Hassan for their special assistance and evaluation in this workshop. Kind appreciations to Misaki Tanaka for her help during this session. Finally, this workshop was concluded by the talk of Dr. Julie A. Moreno an invited speaker of SaSSOH.



Student Session ③

Behind the bat cave

Suppalak Kaewkwan

DC 3, Laboratory of Wildlife Biology and Medicine



Preparation

"A journey of a thousand miles must begin with a single step."

– Lao Tzu, an ancient Chinese philosopher and writer

Student Session pathways

Flashback to the first day when SaSSOH 2016 schedule was announced. I saw something new called "the Student Session" which required a volunteer committee to organize. When I read the details in that mail, I thought it might fun to be a member. It seems destiny required me to do this position. Thus, the committee of Student Session began their long journey of exciting activity.

It's not about the destination, it's about the journey

The Student Session consisted of 4 international students from different Laboratories. How did we create the variety of activities at SaSSOH 2016? From January 2016, we set up monthly meetings to develop our plan. You might think our team felt high pressure to build the Student Session. Actually, no! Because this was the first time to hold the Student Session so we didn't have any pressure. We were pioneers! Our session allowed us to design and create anything that we

wanted to see in September. The one thing that we hoped was the participants would enjoy this activity. So, we tried to put creative things in the session. Fortunately, we also had great collaboration: Mr. Michael Henshaw who assisted filming production, Leading Program student committee who supported each room and SaSSOH 2016 committee who suggested the theme guideline.

The Fruit of my Work

Finally, my big show of the bat cave scenario was ready for SaSSOH's participants. The bat cave scenario opened with a pop quiz on general knowledge about bats. I hope the participants could take home some messages from my scenario. However, the steps didn't go as smooth as I had thought even though I operated the time less than 1.5 hours. I was also thankful to bat cave participants who were active in every movement. The purpose of the bat cave activity was to realize the different viewpoints of social roles in the (fake) bat community. I created 6 types of roles in that society where bats are a part of their life. The participants should imagine what they could do in each situation. It might have been hard for

them to roleplay while they kept their viewpoints. The great key to enjoy this game was playing the fake role based on its angle and to think only from the information in front of them. Of course, I gave additional documents in every role for supportive information. Finally, the show ended and an excellent summary could be expressed by the VIP invited speaker in this scenario "Dr. Boripat Siriaroonrat". He gave fantastic viewpoints from each role and left the message "how to react to a crisis situation based on one's role!"



Discussion time



Best bat score for win a prize

Student Session ④

Environmental Science workshop

Lesa Thompson

DC 3, Laboratory of Toxicology



Lesa introduces the Environmental Science session to participants.

The Environmental Science session was run by Lesa Thompson with assistance from Dr. Yoko Aoyama, Dr. Monica Bando, Professors Sakoda and Nakayama, and Ai Dantsuka.

Fictional news videos about an ocean oil spill were prepared with other SaSSOH student committee members and Mike Henshaw's technical assistance. Participants received new identities—e.g.

politicians and local business owners—and considered the disaster's impact. They discussed the effects of oil on wildlife species. Then they decided how to spend funds on remediation. Each group made short presentations to all participants.

Invited speakers and professors scored participants on communication and participation skills. Top scoring participants received certificates.



Everyone is encouraged to make presentations to all participants after their small group discussions.

編集後記

長年裏方担当の横です。

SaSSOHを初回から担当しています。毎年進化し続けています。

特に第4回SaSSOHはプログラム大盛り! 会場設営早変わり! ワークショップについては本来のアカデミックなセミナー内容から外れている部分もありましたが、実はそこが「リーディングプログラム」なのです。研究プラスト字型人材育成、「国際コミュニケーション能力」が問われるのです。そこを強化するために資金がつき込まれており、院生の皆さんが海外で幅広く活動ができるのもリーディングプログラムだからなんです。

セミナー開催中の2日間タイトなスケジュールでしたが、連休に挟まれての開催ということで招待講演者の先生と小樽、豊平峡観光へ行ってきました。キーノートスピーカーのAna先生は研究から離れて、優しい母親の顔をのぞかせ同行した学生とも和気あいあいの小旅行でした。個人的には同世代ですからお友達感覚で楽しめました。

受付にはニュースレターの表紙を飾った、上野動物園でパンダの次に人気の「動かない鳥」で知られるハシビロコウも登場。遊び心もいれた裏

方にも楽しいSaSSOHでした。

来年度のSaSSOHも9月20、21日に開催されます。

「Enjoy Science!」 by Dr. Soichiro Yamaguchi

